

沖縄の階層格差と共同性

——「安定層」の生活史から——

岸 政 彦

0. はじめに

本稿の目的は、階層格差という視点から、沖縄の共同性について捉えなおすことにある。沖縄的な共同性、あるいは同郷性は、インフォーマルな地域的・血縁的つながりとして、実証的な都市社会学やポストコロニアル的研究において、沖縄社会の「本質的要素」として語られてきた（例えば石原 [1986]、奥田 [1995]、魁生 [1997]、鈴木 [1986]、谷 [1989]、桃原 [1997]、富山 [1990]、中村 [2003]、山口 [2008]、山城 [2007]、山本 [2004]、山本・高橋・蓮見 [1995] などを参照）。

われわれは、沖縄社会において現に作動する規範としての共同性について否定するものではない。しかし、従来の先行研究では、沖縄の人びとによってその共同体的な規範がどのように生きられ、どのように経験され、どのように語られるか、という具体的な過程が、十分に分析されてきたとは言いがたい。

以下では、まず多くの先行研究からふたつの例をとりあげ、実証的都市社会学とポストコロニアル的沖縄研究というふたつのまったく異なる立場から研究された沖縄が、インフォーマルな共同体社会として同じように描かれていることをみる。次に、「沖縄の階層格差と共同体」に関するわれわれの新しい調査プロジェクトの概要を述べ、その調査で得られたいくつかの生活史の語りを分析することを通して、沖縄的な共同性がある特定の階層的位置にある人びと（とくにここでは、教員・公務員・大企業社員などの「安定層」の人びと）にとってどのように経験されているかを簡単

に描きたい。

1. 「沖縄的共同性論」批判

この章では、沖縄社会に関する大量の先行研究から、象徴的と思われるふたつのものを取り上げ、批判的に検討する。鈴木広の『都市化の研究』（1986）と、富山一郎の『近代日本社会と「沖縄人」』（1990）である。

鈴木広は、本土よりもはるかに失業率の高い沖縄県内において、那覇都市圏に人口が集中していることに着目し、その「メカニズム」について分析している。なぜ沖縄の人びとは、失業率の低い本土に流出しないのだろうか。なぜ仕事がなく貧しい沖縄に「滞留」し続けているのだろうか [鈴木 1986]。

彼は、ある企業の経営スタイル、模合（沖縄の頼母子講）の社会的機能、県内の大企業グループの構造、「郷友会」などにみられる「ローカリズム」といった事例を並べ、沖縄社会の「本質」が「ゲマインシャフト的連帯」にあることを主張している。彼は沖縄社会の本質を、次のように述べる。

狭小なるシマの小宇宙への空間的な隔絶と孤立とは、時間のなかでの孤立をも現実的なものとし、かくして、自閉的な特殊主義的なシマ共同体からなるモザイク的集積としての沖縄社会を再生産しつづけたのである。[同書 414]

沖縄における都市化と産業化は、つねに親族結合とシマ結合を再生産し再強化するというパターンをとりつづけており、それが那覇都市圏

のモザイク的社会構造を再現してきた事情である。モザイクをなすそれぞれの共同態のなかには、きわめて強い平準的集団形成が展開し、その集団メンバーは物心両面にわたる助け合いをおこなっている。[415]

鈴木は、なぜ失業率の低い本土に流出しないのか、という問題と、なぜ失業率の高い沖縄に還流してくるのか、という問題と、なぜ県内で那覇に人口が集中しているのか、という問題を混同している。そしてそのうえで、人口の集中と滞留という問題に対して、集中したあとの都市で人びとがどのように暮らしているか、という議論によって答えようとしている。これらすべての問題に対し、鈴木は、沖縄の共同体的なつながりによって説明できると考えているようである。

……〔沖縄の人びとが滞留し、還流する理由は〕現在の本土のそれとは異なる諸特質をもつ沖縄の文化と社会に、沖縄の人びとが深い愛着とともに同一化し自我包絡していることはもちろん、近代合理的な形の産業化の展開に対抗して沖縄的なものによってそれを変質せしめながら、全体としては、いわばゲマインシャフト性の濃厚なバザール性経済のなかで、半就労半失業的な生業を統計的な完全失業に登録しつつ、意外にも悠々たる生活現実を保持しえていることにある。彼我の文化的な距離は率直にいつてきわめて遠く、容易に架橋することはできないように感じられる。[416]

鈴木にとって、沖縄的な水平的結合は、「狭小なるシマの小宇宙への空間的な隔絶と孤立」によってもたらされたものであり、「容易に架橋すること」もできないような、本土のわれわれとはかけ離れた、沖縄に独自の、自然で自明で本来的なものである。

さて、実証主義的な都市社会学とはまったく異なる「批判的な」沖縄研究でも、沖縄の共同性は、実は同じように生得的で、自然で、本質的なものとして語られている。

富山一郎は、戦前に大阪へ移住した沖縄人につ

いて研究し、とくにそのアイデンティティや共同性が、日本という国民国家の権力によって抑圧されるプロセスを描いた。富山にとって沖縄人の共同性とは、『同胞意識・愛郷心』という言葉で対象化されたり、概念化されて把握されるものではなく、彼らが生まれ育った環境が経験的に彼らの体に刻み込んだ身体的な感覚として存在している」ものである。彼はルフエーブルの言葉をつかって、沖縄の『同郷性』により構成された郷友会を「半意識的集合体」と呼んでいる（以上、[富山 1990: 149]）。そして彼は、大阪の沖縄人社会のなかに階層格差が存在することを指摘し、在阪沖縄人のエリート層の人びとが、自らのコミュニティに対して抑圧的にふるまったことを批判している。

富山は、戦前期の沖縄から大阪へ移住した人びとのライフヒストリーなどから、その定住プロセスにおいて、沖縄的共同性が重要な機能を果たしたことを主張する。大阪における沖縄の人びとのつながりは、居住場所や仕事を探す際に辿られるルートであり、そのネットワークは、当時の人びとにとって生活資源としての役割を担っていた。こうした経済的な意味を持ちながらも、富山にとっては、沖縄の共同性は、あくまでも言語化されざるものであり、身体的なものである。

たとえば、このような身体的な共同性があらわれるものとして、富山は沖縄の言葉や民謡を取り上げている。彼は、この本のなかのあるところで、ひとつの小説にでてくるエピソードを取り上げている。沖縄出身の紡績女工たちが、工場で沖縄方言の民謡を歌ったときに、内地人である監督から叱られる。しかし女工たちは、歌の内容が内地の人間には理解できないことを逆手にとり、「これは沖縄の君が代です」と主張し、みごとに歌いつづけることに成功する。このエピソードは、この本のなかのほんの1ページに出てくるだけのものだが、富山の「沖縄的なもの」に対するイメージを、余すところなく表現している。それは、無意識のうちに沖縄の民衆たちの身体に刻み込まれたものである。それは、日本人によって監視され、禁止され、抑圧される。それは、沖縄の民衆たちにとって、抵抗と革命のよりどころであ

る。

大阪の沖縄人社会に階層格差が存在したことを指摘したことは富山の功績である。その点において、保守的な都市社会学者の研究とは一線を画しているのだが、本書のなかの沖縄社会のエリート層（および「疑似エリート層」＝準エリート層）は、日本という国民国家の「手先」として、日本人アイデンティティを内面化し、同郷者たちの身体やつながりを否定し抑圧する存在である。彼は沖縄的な生活様式を否定し「日本人」に近づけるための「生活改善運動」の分析を通して、在阪沖縄社会のエリート層たちの「共犯者的」なふるまいを批判している。富山の研究からは、われわれは沖縄のさまざまな階層の人びとが、実際に自らの共同性をどのように生き、経験し、そしてそれをどのように語るのかを知ることができない。すくなくとも現在では、沖縄のエリートは日本人アイデンティティに回収されてなどいない。そのようなアイデンティティのあり方を否定するものではないが、それにはさまざまな条件がともなうだろう。

以上のように、まったく異なる政治的立場にあるものによる研究でも、沖縄的な共同性は自明視され、本質化されている。さらに、階層格差が存在していても、階層的に上位にあるものたちは、沖縄的なものを差別し抑圧する国民的な権力に加担していると述べられるにとどまっている。

とくにここでこの二人の議論を引用したのは、この両者を批判したいわけではなく、ただ単に、両極端の立場にいるものたちが、沖縄的なものについてまったく同じことを述べているということを強調したかったからである。沖縄的なアイデンティティや共同性というものは、それが「悠々たる生活現実」（鈴木）であっても、あるいは差別と抑圧の対象になるしかないものであっても、結局は同じように表現されているのである。

したがって、ここでの課題を、次のように設定することができる。まず、沖縄の共同性は、ほんとうに本来的で自然な、自明なものであるだろうか。それは、沖縄の人びとがすべて等しく包摂されそのなかで生きるような、超越的な規範なのだろうか。沖縄の共同性は、沖縄の人びとによって

どのように生きられ、経験され、またどのように語られるだろうか。

沖縄の人びとは、みずからの共同性や同郷的つながり、あるいはアイデンティティというものを、自動的に引き継ぎ、無意識のうちに身体化し、そのなかに閉じ込められて（「隔絶と孤立」）生活しているのではない。おそらく、人びとは（われわれと同じように）そこから距離をとり、再帰的に語り、道具的に利用し、あるいはまた、そこから排除されもしているに違いない。

このような多様で複雑な共同体との関係の取り方は、どのような視点から描くことができるだろうか。

2. 「階層格差と共同性」調査の概要

この課題を追求するためにわれわれが設定した具体的な研究目標は、「沖縄の共同性を、階層格差という視点から捉え直す」ということである。2012年度から13年度にかけて、龍谷大学人権問題研究委員会より研究助成を受けて、数名のチームで調査研究をおこなっている。現在も継続中である。

この調査の主題は、沖縄の人びとを、教員・公務員・大企業社員などの「安定層」、飲食業などのサービス業に就く「中間層」、日雇い労働者などの「下層」にカテゴリー化し、それぞれの担当者が参与観察や生活史法などの質的調査法によって調査することである。筆者の担当は安定層の人びとの生活史の聞き取りである。他に、大阪市立大学院の上原健太郎が中間層を、社会理論・動態研究所の打越正行が下層を担当している。現在までの調査については、「中間報告書」を参照されたい（岸ほか [2013]）。

私は、2012年の夏から現在（2013年12月）までに、31名の安定層の方々から詳細な生活史を聞き取っているが、以下ではそのなかから4人の語りを引用し、沖縄の共同性がどのように語られるかについて分析する。なお、次章で使用するデータは、2013年度の日本社会学会大会での報告において引用したものと重複する [岸 2013 b]。

3. 安定層の生活史と語り

3-1. A さん

2012/8/20（月）聞き取り。1983 年、糸満生まれ。兄、妹、本人の全員が琉球大学卒。大学院で修士号を取得したあと県内で高校教師。現在は中部の進学校で教えている。両親は離島出身。祖父は農家、父は琉大出身で教員、母は専業主婦で教育熱心だった。父の兄弟も大卒の教員が多い。

（母は）教育熱心ですね。専業主婦……はい。大学は出てなくて、母の所は逆にお金が全然ないから高校までは出すけどあとは働けていわれて、働きに出されて内地にも一回行ってる。商業高校の商学部……？ だから本当は普通高校行って大学行きたかったってしょっちゅう言います。

（「もう教員になることは大学入る前から思ってたんですね」）

そうですね。だから、国語が……結局、本読んだり何か調べたりするのが、図書館が好きなので、まず司書がいいかなと思ったんですけど、司書はまあ採用がないっていうので。それで、合理的な考え方で進路選んでます（笑）。

（「そういう本というか、知的なものに関わるお仕事っていう」）

知的……？ 本でしたね。本が好き。でも私は偏ってたんじゃないかな。兄はいろいろ。

（「同じ本何回も読むタイプ？」）

あーはいはい。そんなかんじです。ジャンルが偏ってるので（笑）。

音楽はロックが好き。……いやでも音楽は興味がなく育ってきて。家にはあんまりなかった……あ、でも……いや、ないですね。ないです。

（「やっぱり本ですね、そうすると」）

本です。親が図書館に連れて行ってくれたので。町立図書館がなかったの、親は本読ませれば良い子に育つっていうことを信じ切っていて（笑）。兄妹三人図書館に毎週毎週連れて

行ってもらったんで、そこは感謝してます。

（「それは楽しみだったんですね？」）

もう、とっても。借りてきた本も一日でばって読んで、すぐ次の図書館。

（「家にその、実際本があるかんじなんですね？」）

はい、あります。たくさんあります。

（「例えば伝統文化的なことって、何かしてますか？」）

私は三線ちょろっと手を出したんですけど。大学院に入ってから（笑）。

（「サークル？」）

そうです。琉大の。一年だけ（笑）。辞めてますね、もう。三線もってるけど。いや、嫌いじゃないです。好きです。だから弾きたいなあって思ってるけど、私は致命的にちんだみ（チューニング）が出来ないという（笑）。耳が悪くて。

（「曲目とかって入門的なかんじですか？ 安里屋ユンタとか」）

はい、そうですね。そんな簡単なところです（笑）。

（「なんかその、いわゆるガイドブック的な沖縄文化に触れる機会はなかった？」）

はい。なかったけれど、カッコいいからやってみたいと思って、大学は3年のときに空手部も入ったんですよ。でも、自分はあー空手は続けられないと思って（笑）。

これも1年間で辞めて。それで三線だったら自分でぼちぼち続けられるぞ、よし、基本が叩き込まれたと思ったら続かなかった……ちんだみが出来ないっていう（笑）。一応弾きたいと思って実はほんとに出してるんですよ、いつでも弾けるように。アパートに。やっぱ練習しようと思っててもやんない……。

（「いまの暮らしのことでその、小学校中学校のときの友達って繋がりますか？」）

ありますあります。私はあります。やっぱ高

校……でも私の場合は、小学校のとき仲良かった子が同じ高校に来たって言うのがあるので。

（「わりと『階層的』に別れちゃった子とはあんまり繋がらないですか？」）

えーと、別れちゃった子……高校が別れた子？ あーそっか。それを考えたらやっぱ階層は同じような。高校が一緒、高校が中心です。

（「模合とかされてます？」）

あー模合はしようって言ってやってないです（笑）。忙しくて会えないみたいな（笑）。しようっていったのは、大学の友達で。なんでかっていったら、私の頃、大学の友達はまだ働いてる地域がバラバラで会えないから、月に一回模合ってやったら会えるんじゃないかと。で、高校のときの友達は結構那覇近辺とかで働いているので、イライラするから飲もうっていったら、付き合ってくれるので（笑）。そこはあると思います。

3-2. Bさん

2012/8/28（火）聞き取り。1966年、那覇生まれ、男性。4人きょうだい。両親は北部出身、1960年ごろ那覇の繁華街に移動、その後結婚・出産。父親は技術者で長い期間、家を空けることが多かった。Aさんが高1のときに父親が自宅を購入、那覇の郊外へ転居。琉大出身。大阪の会社に就職するがすぐに公務員試験に合格、採用され、沖縄勤務のためUターン。娘がひとり。那覇郊外の実家を所有しながら那覇の都心の賃貸マンションで暮らす。

っていうか友達いないので。周りにですね、似たような歳の子いるんですけど、周りってまあ徒歩5分ぐらいのところにはいるんですけど、まあやんちゃ過ぎる連中だったんで遊びたくなかったんですねそもそも、そもそもですよ。で、隣にいる兄ちゃんたちはもう年上の人たちばっかなのでヘタに遊ぶと虐められるし、まあ友達いなかったですね、学校上がるまでは。なので本読むしかないんですよ。

（「家の中であんまり方言で喋ってないです

ね？」）

うち親父いないので、お袋も〇〇（出身地の地名）の人間ですから。ここにいると周りの人いろんなところから来てる人が、あの隣の爺ちゃんたちは宮古の人ですけど、ところが奥さんである婆ちゃんはやんばるの北部の人なんですよ。なので、この状況では方言出てこないんですよ。

隣の人も、隣のおばちゃん家もやんばるの人なんですよ。で、たぶんですね、旦那さんの方は那覇もしくは中部かなんかの人なんでしょうけど、となると方言で喋らないんですよ。で、その近くの人、土着してる人いましたけど、那覇の人なんで方言あんまり喋らないですね。喋っても那覇の方言なので、〇〇の方言使って喋らないですよ。だからそう、その〇〇の親戚のおっちゃんとかおばちゃんとかが来るとき以外はお袋は方言喋らないですよ、一切。

（「周りには、沖縄の言い方で寄留民っていうんですかね、やっぱり地方から？」）

特にあの辺はですね、飲み屋も多いので、飲み屋のおばちゃんみたいな人もやっぱりいるですよ、そこらへんに。長屋みたいなところも含めて。となると、ほんとにいろんなところから来てるので、イントネーション含めて方言っぽいのは喋りますけど、強烈な、あの方言では喋れない。喋るともうみんな通じない。で、那覇の中心地に近いとこだったんで、やっぱり本土から来た方々もちょろちょろといるんですよ。そうすると尚更使えない。

（「小さい時に沖縄的なものに囲まれて育ったっていう記憶なんかはあんまりない？」）

んー、それが沖縄的だったかどうかすら、もうよくわかんないですけどね。だからいわゆる、あの例えば『ちゅらさん』とかですよ、そういうのに出てくる状況みたいなのはほぼないですね。

△△（転居した郊外）ってとこがね、ものすごい土着してる人たちが、ちょっとこんな感じ

してて。もう引っ越して三十年以上経ちますけど、基本的にそともの、よそものですね、ウチら。夏になったら、エイサーじゃないですけど、本来そういう地域、地域で「道じゅね」とかいろいろエイサーをね、地域こじんまりとしたのやるんですけど、基本的に呼ばれませんから。うちはそういう青年いないから、呼ばれないのもあるんですけど、私いるときは（も）基本的には声かからないですからね。

で、あの入会地みたいなもの持ってるんですよ、地元のあれで。で、入会地の、地元の人たちのこの土地は、基本的にこの元々いた人たちが共有して使うものであって、余所者が使うとこじゃないってもう完全にこうなってますよ。

いや別に取ろうなんて気当然ないんですよ。自分のもんじゃないんですから。で、別になんか利用しようって気もないんですけど、基本的に一線を画しているな、ちょっと。

それ最初それ知らなくてですね、お袋がなんかそういう話してたんですけど、「えっここそういうところなの」、「そうよ、ここはもう基本的に余所者はずっと余所者だから」。「だけど隣のおばちゃんとは仲良い」、「あれは、隣のおばちゃんの個人の付き合いだから。個人じゃなくて家族とか地域の付き合いになった瞬間こうなのよ、ほんとに」。「あ、そうなの」、「そうよ」って。

（三線は）いやああの、買って練習してたんですけど、まああのうるさいので。買ってちょっとして結婚しちゃったのですね。もう駄目なんですよ、子どもがエーンってすぐ泣くとか。

（「初めて触ったわけですか？ 三線はその時」）

そうですね、その時が。まあ暮らしに全く縁がなかったですね。

（「なんでまた急に」）

いやあ私元々音楽好きなので。ただウチの実家は、そういうのはまったくないお家だったんで。勝手に音楽好きだったんですけど、自分

一人で暮らしてる分には何買ったて文句はないだろうっていう。とりあえずなんでもかんでも、うち弾けてないですけどバンジョーまでありますからね。

（「純粹に音楽として、三線を？」）

ああ、そうですそうです。

（「別に沖縄人が、とかじゃなく？」）

あ、ではなくではなく。あの音じゃないと雰囲気出ない曲とかあるじゃないですか。ええ、ああいうのでとりあえず。ただ三線だとボリュームが足りないので、さっきバンジョーの話しましたが、バンジョーとかと音似てるっちゃあ似てる。ちょっと、ちょっと響きがあのちょっとと金属的ではありますが。なので三線無い時はバンジョー、チューニング変えて、三線的に弾くのもありかなと。ただどう考えてもあのカントリー風になっちゃうんで、ちょっとジャズ風にしてやったらどうかなっていろいろ考えながらなんかやってたんですけど。ただ子ども出来ると、ビヨーンって鳴った瞬間、エーンって泣くんで、ダメだもう。もう弾けないよおれ。

模合もですね。二回、二か所でやってたんですけど、一か所完全にあのみんななんかあっちこっちに、散ってしまっていなくなって。で、今集まっているのはその〇〇君とかあの〇〇市役所のやつとかあるんですけど、あれは年に二回しか集まらないので、夏場と冬場。

（「高校とか大学の友達？」）

そうですそうです。

（「割と同じような階層の方がた」）

ええ、そうです。で、基本的にですね。もともと階層がどうのこうのって気にしてたわけじゃないですけど、あの大学のサークルのメンバーなんです。母体としては。

（「だから沖縄的な、いわゆるコミュニティーの濃さっていうのは全然、ロマンチックに語ってはいけないってことですか」）

と思います。あの、ちゃんとまあ、ビジネスに結び付けられるようなコミュニティー作りが

出来るのであればいいんですけど。けっきょく地元の人たちは地元の人たちだけになっちゃってるし、その中でもじいさんはじいさんだけとか、おっちゃんはおっちゃんだけとか、結局その世代でなんかそういう、みたいなのできてる。それがコミュニティとして意味あるのかと思ってるんで。

(「だから公私のあれがない感じ。」)

そうそうそう、ないんですよ。いろんなことできゅっと縛られる感じありますね。だからそのまだ20代の頃とかはですよ、だからちょっと話したら、「あ、小学校どこなの?」とか聞くんですよ。で「〇〇」とかって。「え、え、何年生まれ」ってまた聞いて。「38年」って。「あなたにいに(兄)と一緒にだ」「え、どこのにいに?」「私苗字なんとかでなんとかで」「ん? んで?」「にいにね、何とかっていうの」「ああお前シゲの妹か、お前」。どうもそれはそれは。あ、にいににに言っとくよって。ん、言わなくていいよ、そんな仲良くなかったから言わなくていいよ(笑)。

(「やりにくい(笑)」)

コンパもそうですね。コンパとかでも私あの妹8つ下なので全然平気ですけど、その、2個下とかに短大とかに妹が行ってるとその短大に申し込みに行ったら、あれ、なんとかさん、妹とかいますとか。あ、いるけど。え、2個下うちの学校通ってる。通ってるけどって、そしたらそこにいた10人ぐらいの女の子に、△ちゃんのお兄さんらしいよ。

(「やりにくいな。やりにくい」)

もうもう動けない。あ、よろしくお願ひします。全く身動きとれず。

(「でもそういう中で逆に出会いがあったりもするんでしょね」)

もあるんでしょね、そりゃね。ただ、ただ7,8割が動けなくなる。悪い人に全くなれないので。

(「なれない。羽目を外せないですね。みんながおっきな家族みたいです。すぐ特定されてしまうというのは」)

そう、だから3つぐらい質問されると、だいたいあの素性がバレていくという。

3-3. Cさん

2012/9/3(月)聞き取り。1983年、那覇生まれ、女性。父は古くから那覇で商売を手広く営む経営者、母方の祖父は政治家も輩出した大手企業の社長。県内の大学を卒業したあと、県内の企業に就職。

なので、所謂、えー、THE・沖縄じゃない暮らしを、逆に行っているかもしれません。親戚がたくさんいるわけでもなく、核家族的に、あまり方言もわからず過ごしている方ではあると思います。

昔のそのうちの父が学生の頃ぐらいは、例えば地域で初めてコンクリート建てのおうちで、初めてテレビが入ってまわりの子達が見に来てって、お手伝いさんがいて、というような暮らしだったようです。昔はですけど(笑)。

まあ普通より……普通……あの、商売人はうちだけで、あ、うちだけっていったらあれなんですけど、例えば何か経営者とかではないので、そんなすごいお金持ちでもないですけど、まあそれなりに公務員がいたりとか、学校の先生だったりとか。まあ安定職の方が多いかもしれません。

(「子供のときには方言使用はあんまりなかった?」)

あんまりなかったです。ほぼなかったです。あんまりわからないです。うちの祖父母も元々ね、内地とずっと取引してるので標準語は喋れるんです。子供達には標準語で喋ってくれてたので、あんまり。うーん。教育方針はどうだったかわかんないんですけども、子供だからそんな、商売でもお客さんにはきっと標準語だと思うので、家族だけじゃないですかね、きっと。方言使ってるの。夫婦だけとか。

(「いまの交友関係で言うと、どういうところ

が多いですか?」)

今現在ですか?今現在は全然学生と関係ないところの方が多くですかね。どこでも友達作っちゃうんですすごいことになってますけど(笑)。

(「えっと、じゃあ小学校中学校の子とはもう切れてる感じ?」)

本当にコアな人たちが残って、2,3人……5,6人はいて、それぞれ。

(「やっぱり同じような階層?」)

ですね。やっぱり。ルートというか、感覚が同じ人。向上心があるとか、その良い話が出る人と付き合いがあるんですけど、やっぱりどんどん感覚が違ってくるとなかなか会いづらくなってきてます。あの一、高卒でそのまま結婚しちゃって、とか。

(「えっとそれは感覚で選んでっていうかんじ?」)

そうすると世界が若干変わってくるじゃないですか。なので、話ってやっぱり(合わなくなる)。そうですね。なんというかこう、日々の話ではなく、どんなに〇〇かって話をした方が楽しいじゃないですか。なのでそういう話が出る人たちがばかりかもしれないです。

(「高卒で働いちゃってって、いう方とは、疎遠になってくるってことですね」)

なっちゃいます、はい。結婚してお母さんになってとかそういう。

(「模合とかしないでしょう?」)

大人になってからしてます、一件。大人模合して。

そうですね。アナウンサーの人たちとか、クリエイターの人たちとかと、大人模合を。

(「まあ異業種交流会みたいなものかんじですよね」)

そうですそうです。やっぱ沖縄ですと大事なので。

でもなんか、(東京に行って)一年ぐらい経ったときに、新宿でエイサー祭が。あれ知らなくて、たまたま新宿にいてエイサーをやり始めたときはものすごいう、高揚したというか、

うわ私沖縄人なんだって思いました。

(「あるんですかそういうふうな」)

ありました。うわーってなんか、何人かで居たんですけど、ちょっと待って見させて見させてって言って、すごい嬉しい気持ちになったんで、私沖縄の人なんだなってつくづく思いました。

(「へえー面白いですね。面白い面白い。それまでないでしょ? 地元の青年会とか」)

全然ないです。全然ないです。まあ、ずっとねコマーシャルとかテレビとかで見てるので。(「あ、テレビで」)うん。沖縄好きなんだ、沖縄人なんだなって。ルーツそこなんだなって。

(「沖縄好きですか?」)

好きです。

(「面白いですね、東京でエイサー見ておおって思うって」)

思いました(笑)。

(「沖縄の社会のあかんとこってどこやと思いますか?」)

なあなあなところ。

(「お互い許し合って、厳しくない?」)

伸びない(笑)。仕事しててもそうですよ。求めないので。逆に出来る人が打たれるって沖縄独特だと思います。(自分の会社についても)思います思います。やっぱり出ると打たれるし、出来ないと庇われるし。うん。やきもきするところはいっぱいありますね。特に若い人たちはみんな出来るので、ちょっと中間ぐらいにいくとやっぱり。

(「バブル世代が使えなかったりしますよね」)

そうそう、もう全然。

(「すいません(笑)」)

仕事関係なければ嫌いじゃないです。仕事してたらちょっと困ります。

(「沖縄的なところで助けられたことはないですね?」)

沖縄的なところ?

(「沖縄的なネットワーク、例えば地縁とか血縁とか。そういうものに困ったときに」)

あまりないですね。

(「ないですか。ご自身の力できたってということですね」)

そうですね。

(「基地の引き替えの補助金に依存してるっていう話がよくありますけど」)

経済的にですか？ 基地がなくなったら片足なくしちゃう状態になるんですよ。やっぱり観光資源はそうなんですけど、観光って自分達からアプローチしていきなさいいけないじゃないですか。

でも基地ってもう、あるの。所謂権利収入みたいなかんじ。労働収入と権利収入のバランスを保ってるのかなという感じがします。だからその労働収入側にもうちょっと上手いアプローチができるような施策作ることが出来ればいいんですけど、なかなかそれって追いついてなくて、もう来るものをとりあえず対処してるみたいなかんじに、そういうところじゃなくて、戦略的に観光を受け入れるような仕組みをちゃんと作ることが出来れば、基地がなくなっても権利収入になる可能性はあるんですけど。もうちょいがんばらないといけないかなという気はしてます。

3-4. D さん

2012/8/20 (月) 聞き取り。1973 年、豊見城生まれ、男性。地元の公立高校から琉球大学、修士まで。現在は民間のコンサルタント会社。結婚して子どもがひとり。父親是那覇の公立高校の定時制出身、軍雇用(および全軍労)などを経て、那覇周辺で青果店。母親は離島出身、中卒、専業主婦。

豊見城の中でもほんとに那覇との境界線上の地域なので、1960、70 年代ぐらいに家がばってできて、ブルーカラーの人たちがばって住み始めて、80 年代に入ってサラリーマンがもう少し北かわの地域にばって住み始めて。この辺なんかは 70 年代から 80 年代なので、比較的黑人白人とかそれに準じる人が多い

と思んです。

まず、そうなんですよ。あの若年者、その、仰ったその沖縄の独特な助け合いとかで持ってるっていう感じはそう、このなんだろうな、そうせざるを得ない。要するに社会構造とか世の中の仕組みになってるからそうなるんであって、っていうような。そういうなんだろう、文化人類学的な意味でのなんか特質ではなくて、やっぱり社会構造の歪としてそうせざるを得ない。っていうようなところで、そうなるんだろうなって。だからあんまりそういう特性、沖縄って独特だからねーみたいなのをあんまり実感としてそんなに感じないですね。

で、どれぐらい問題かっていうところでいうと、これはたぶんボディブローのように効いてくる。ほんとにその例えば急に犯罪が増えるだとか、暴力事件が起きるだとか、なんだとかっていうよりも、じわじわとボディブローのように出てきているから見えにくいだけであって。

結構沖縄って、思ってる以上にたぶん核家族率は高いんじゃないかと思うんですよね。で、だから、で、親と子の結びつきが強いとは言っても家庭は別になってる。ちょうど僕らもそうだけど、別居してたりなんかして。ってなった時に、やれ親が介護になった時に割ける家族の余力がないだとか、お金の余力がないだとか、っていうのがなんとなく見える、はっきり見えてこない、とかっていう感じであって、だから特養の整備率はたぶん全国一。みんな働いてるから結局家で見られないので。

そういう意味で言うとやっぱりライフコース的なスパン、要するにある程度スパンで見ないと、たぶん若年失業の影響っていうのは見えんのかなと。短期的にみると、そんなに困ってない感じはしますけど(笑)

……やっぱりその地元ってのがある種の生活と人間的な繋がりとかを担保する場になってるから出ていかないんだ、みたいな。やっぱりそういうのが機能している、要するにそこに留まら

ないと生活していけない。色んな意味でストックがないからっていう意味で戻ってくるんじゃないかなろうかと思ったりもするんですけど。

(以前参加した国際ボランティアの)参加者の、同期生の模合という。僕はそれだけ。だけど、たぶん僕ぐらいの歳だったら例えば高校の同級生とか二つ三つやって嫁さんに怒られてる人は知ってます。基本飲み会なんでね(笑)。

なので、だから、うちのかみさんなんかも昨日は中、小学校の同級生の同窓会とか行ってましたけど。模合ではないんですけど。まあそんな感じで、だから、ほんとにあの一付き合いの広い人は、広いというか深い人は、たぶん毎週金土は模合が入ってるみたいな人はいる、ザラにいると思う。で、その中で仕事の融通の話とか出てくるから。

(「そうですね。そうすると、地元のすごいベタな沖縄社会みたいところからちょっと距離を置く生活をされてる?」)

僕はどっちかというところかなりイレギュラーなライフコースというかキャリアだと思います、たぶん。

いう感じではありますね。まあ結構あの、で、僕自身も嫌いってわけではないので。まああの通り飾ってる感じだし、結婚式もあんな感じで、琉装で。

(「ああ琉装ですね」)

これは嫁さんのきっての希望だったので。識名園で。

(「あっ識名園で?」)

はい(笑)。あの嫁さん、(略)世界遺産でやりたいという(笑)。

(写真を見ながら)(「これ余興、沖縄の結婚式の余興ですね。(笑)」)

で、自分で踊りましたよ、あの幕開けの踊りを。かぎやで風。三か月ぐらい集中特訓で(習って)。これまた嫁さんの意向で。

なんかあの、僕個人的に親が聞いたり友達から聞いたり自分で勉強した範囲で言うと、その

沖縄の人の働きぶりとかなんくるさ加減というんですかね、はたぶん復帰後のもんじゃないかと思ってるんですよ。うちの親の話とかを聞くと、したたか働いてるので。

全然あの、なんくるでてーげーな仕事してたら食ってけないので。

(「なるほどね。」)

逆に復帰して公共事業があったり、キセツ(季節労働。本土出稼ぎのこと)に簡単に、復帰前より簡単にキセツに行けるようになったりしたから、なんくるでてーげーなライフスタイルができるようになったんじゃないの、みたいな。

たぶんだからその、あの、だってうちの親もそれこそ20(種類)仕事変わってるし、で、しかも軍雇用に行って、ほらベトナム戦争の真っ最中なので、ほんとに24時間、三交代で物資をベトナムに送ってるっていう状態なので。遊んでる暇があったら、その分軍作業に行けばお金になるのでみんな働いてるんですよ。中学生でも字が書ければ採用したって言うてましたから。ていうわけで遊んでる人が馬鹿だと。で、しかも離島に家族を残して来ていれば、年端もいかない兄弟がいれば、働かざる、働かんわけにはいかんっちゃう。中で、そんな復帰前なんくるでてーげーな人っていないと思うんですよ。だからなんくるでてーげーなライフスタイルっていうの復帰後のもんじゃないかと自分とはとても思うんです。

たぶんビーチパーティだのなんだの、遊ぶ文化っていうのは確かにアメリカさんから習ったり、沖縄の元からの伝統かもしれないけれども、それはやっぱり労働とセットになってる遊びであって、この遊びの部分が大きく見えるようになったのはたぶんそのなんくる的な部分が大きく見えるようになったのは僕は絶対復帰後じゃないかと踏んでいるんですが。

(「北部の人口流出が75年ごろでピタッと止まるんですよ。で、ガーっと減ってきて戦後。で、そのくらいでピタッとこう維持するんですよ。たぶんこれ公共事業で飯食えるようにな

ったんじゃないかねえかって思うんですよ」)

75年だったらちょうど海洋博の年なので、たぶん公共事業で飯食えるようになったのと、あとその辺が減る限界みたいな(笑)。ところだったんじゃないですか。

4. 結 論

以上、4名の生活史について、もういちど簡単にまとめよう。まずAさんは、子どものころ、教育熱心な専業主婦の母親のもとで、本に囲まれた生活をおくっていた。特に沖縄的な伝統文化にふれることはなかった。琉球大学に入学してはじめて、サークルで三線を練習ししたが、すぐにやめている。現在では同じような階層の友人たちとの付き合いが多い。模合もしていない。

Bさんの生活史は「移動」によっていろいろされている。幼少期を過ごした那覇の都心部の盛り場は、その住民の多くが「寄留民」(沖縄の表現で流入者のこと)だった。近所にすむ人びとの出身がそれぞれバラバラで、自分たちの方言が通じず、会話はかえって標準語が多かったという。また、高校のときに転居した先が那覇の郊外で、当時はまだ古き良き沖縄の共同体が残る地域だったが、そこでBさんは他所者として扱われていた。伝統文化にも縁がなく、三線は大人になってギターをコレクションするようになってから始めている。また、沖縄社会の「地域主義」「狭苦しさ」についても、多くが批判的に語られた。

Cさんはもともと沖縄の名家の生まれで、はじめから沖縄の土着的なつながりを経験していない。親戚も「安定職」が多いことが語られている。方言も使用しない。交友関係はかなり活発で、「異業種交流会」のような模合をしているが、同じような階層の人びとが多いと語っていた。また、配属されて一時期暮らしていた東京でエイサー祭りを見て、あらためて「沖縄の良さ」に気付いたという。沖縄の共同性については、やはり批判的に語っていた。

Dさんもまた、那覇周辺のニュータウンという流動性の高い地域で生まれ育っている。Dさんの特徴は、コンサルタントという職業にも関係しているが、沖縄社会の規範や構造について、非

常に再帰的あるいは分析的に語っていることである。そこでは、沖縄の共同性は、経済的な生活資源のような社会的機能を持つものとして語られている。地元の地域社会から相対的に離れた生活をおくっていて、もっぱら同じような文化的階層の人びととつながっている。また、沖縄の伝統文化にふれることのない暮らしをしていたが、結婚式のときに、もっとも伝統的な琉球舞踊を、短期間で「特訓」して披露している。

わずか4名の例から一般的なことを断言することはできないが、とりあえず今後のさらなる調査研究を方向付けるための仮説として、次のようなことをここで指摘しておきたい。ここにあげたものだけでなく、31名の安定層の生活史の語り全体を通して浮かび上がったことは、かれらが沖縄の共同体から「相対的に離脱した」生活をおくっていることである。もちろん、離脱といっても、沖縄の土着的な共同性からまったく切り離されてしまっているという意味ではないが、それにしてもわれわれの調査における他の対象と比較して、これらの人びとが生活に必須の資源としての共同体や同郷性規範からかなり自由である、ということを描くことは可能だろう。

この層の多くの人びとは、琉球大学や他の名門大学に進学し、安定した仕事を得ることによって、地元の共同体的な社会関係から離脱し、同じような階層の人びとと交流することが多くなっていく。こうしたつながりは、それ自体は楽しみのためのものであり、生活資源としての機能は持たされない。あまり早急な結論は出せないが、それは徐々に、「死活問題としての共同体」ではなくなっていくだろう。

また、伝統文化との関わりにおいても、富山一郎が述べたような、無意識的で身体的なものであるというよりは、あとから意志的に学習されて獲得されるものであるようだ。多くの語り手が、家庭内では標準語を使用していたと語っている。それは進学のためでもあるだろうし、また沖縄的なものに対する否定的な価値付与の結果でもあるかもしれない。いずれにせよ、方言や三線や琉舞は、琉球大学のいくつかのサークルにおける活動が典型的であるように、大学に進学してから「習

い事」として身につけるものである。もちろん、このように成長してからの学習によって体得される文化が「フィクションである」とか「構築されたものである」などと言うつもりはない。われわれはしばしば、沖縄の伝統文化というものを、沖縄の人びとが「自然に」その生活のなかで接しているようなものとして自然化しがちである。しかし、安定層の人びとの伝統文化への「近代的な」接し方に関する語りは、伝統文化に関するわれわれのイメージを変容させる。

さらに、多くの語り手が、沖縄の共同体や規範について、再帰的・分析的・批判的に語っている。このこともまた、教育を通じて文化資本が蓄積されていることと、かれらの生活資源が共同体に必ずしも依存していない、ということをしめしている。

全体として、安定層の人びとの生活条件が、(1) 土着的な共同体から「離脱」すること、(2) 伝統文化をあとから意識的に「学習」すること、(2) 沖縄社会について「批判的」に語ることが可能にしていることが明らかとなった。このようにして、階層という視点を取り入れたとき、先行研究における沖縄の「自然な」イメージは、揺るがされることになる。

今後の課題としては、まず、研究チーム全体の共同作業によって、異なる階層における人びとの語りを比較することが必要である。また、安定層の生活史の分析という研究課題に限定していえば、上記のそれぞれの点について、収集したほかの語り手の語りをまとめながら、あらためて分析していく、という課題が残されている。

参考文献

- 石原昌家 1986『郷友会社会』ひるぎ社
- 奥田道大 1995『コミュニティとエスニシティ』勁草書房
- 魁生由美子 1997「沖縄をめぐる関係性のネットワークと文化の現在」『立命館大学人文科学研究紀要』68号 立命館大学人文科学研究所
- 岸 政彦 2013a『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版
- 岸 政彦 2013b 口頭発表「沖縄の共同性と階層(3)」(打越正行・上原健太郎と連名) 2013年10月12日 日本社会学会大会(慶応大学)
- 岸 政彦・打越正行・上原健太郎・青木恵理子 2013『沖縄における階層格差と人権——2012年度龍谷大学人権問題研究委員会助成研究プロジェクト中間報告書』龍谷大学人権問題研究委員会
- 鈴木 広 1986『都市化の研究』恒星社厚生閣
- 谷 富夫 1989『過剰都市化社会の移動世代——沖縄生活史研究』溪水社
- 桃原一彦 1997「沖縄を根茎として」奥田道大編『都市エスニシティの社会学——民族／文化／共生の意味を問う』ミネルヴァ書房
- 富山一郎 1990『近代日本社会と「沖縄人」——「日本人」になるということ』日本経済評論社
- 中村文哉 2003「沖縄社会の地縁・血縁的共同性とハンセン病問題」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄——ディアスポラから希望へ』人文書院
- 山口 覚 2008『出郷者たちの都市空間——パーソナル・ネットワークと同郷者集団』ミネルヴァ書房
- 山城千秋 2007『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』エイデル研究所
- 山本英治 2004『沖縄と日本国家——国家を照射する〈地域〉』東京大学出版会
- 山本英治・高橋明善・蓮見音彦編 1995『沖縄の都市と農村』東京大学出版会